

看護学生の精神看護学実習におけるカルテに頼らない情報収集の意義

Significance of Information Collection without Relying on Medical Records in
Nursing Students' Psychiatric Nursing Practicum

酒井 美子, 土肥 しげ子

要 約

本研究の目的は、カルテに頼らない情報収集の方法はどのような意義があるかを明確にすることである。研究対象は本学の精神看護学実習対象者3年生79名である。カルテを頼らない情報収集の方法に対するアンケートの内容を、ベレルソンの内容分析の方法を用いて分析した結果、5つのカテゴリが形成された。そして、カルテを頼らない方法は、1) 学生の主体性を高められる 2) 先入観にとらわれず対象を人として向き合える 3) コミュニケーションを駆使できる 4) 自分の得た情報の意味づけとしてカルテを活用できる 5) 学生の緊張を高め、不安を与えるなどの意義が示された。主体性を高められない学生については、学生のレディネスに応じた個別的指導が必要であることが示唆された。

キーワード：精神看護学実習、情報収集、カルテの活用、看護学生、内容分析

はじめに

今、ほとんどの看護教育では、看護過程の方法を基に臨地実習指導を行っている。看護過程は、知識、理論を重視して、科学的根拠に基づく援助の実践（EBN）を求めて、強化されてきた。しかし、ヘンダーソン¹⁾は「看護過程が要求する看護記録を綿密に仕上げる作業は看護婦たちに看護の実質よりは形式を重んじさせるようである」といつてきた。まさに、学生の多くは、自ら積極的に患者とかかわる以前に、患者の情報を得なければかかわれないという思いが先行しているようである。また、学生のほとんどは、看護過程の記録を仕上げることに多くの時間を費やし、苦痛を感じている。そのため、記録を埋めるために、早く情報を得て看護計画を立案しなくてはならないと焦りを感じ、必要な情報をカルテに頼ってしまう。

これでは、日々刻々と変化している対象の状況を捉えることができず、形式的な対象理解になりかねない。また、カルテがなくては記録ができない。看護計画の立案がされていないと、看護ができないとまで思っているのではないかと危惧をいだく。

杉山氏²⁾は「臨床の知を学ぶ場である臨地実習においては、学生の体験が学習の中心におかなくてはならない。“関わり働きかけて、感じ、思い巡らし、考えて、再び働きかける”実習におけるこの体験過程こそ看護教育において絶好の学びの構築過程である」という。また、持永氏³⁾は、「臨地実習における学習効果を高めるには、役割意識を持たせ、人間関係の技術、自己の成長を促す場、体力の増強、そして専門知識の活用ができるような指導が必要」といつている。さらに、私たちは、臨地実習においては、学生の自らの心の動きから、患者に関心をもち、患者を知り、さらに自分を振り返ることを繰り返し、看護のセンスを高めていくものであると考える。

精神看護学実習においては、精神障害者に対する誤解や偏見、不安によって、対象とかかわることに消極的になってしまう傾向がある⁴⁾。さらに、カルテを見ての情報収集のタイミングによっては、対象への先入観を強め、偏見や、不安を助長させてしまうと考える。

これまでの精神看護学実習における患者—学生関係と、患者理解に関する研究は数多くなされているが、看護過程を展開する中で、情報収集に関する研究

は数少ない。^{5) 6) 7)}そこで、今回、個としての自分と個としての対象との出会いを大切に、カルテに頼らない情報収集をとり入れた実習展開は、学生にとってどのような学習意義があるのか検討した。

研究目的

カルテに頼らない情報収集は、学生の学びにどのような意義があるのかを明確にする。

操作的用語の定義

情報収集とは、オレムの看護理論に基づく看護の視点から、対象の健康な側面も踏まえて全体を把握して、看護介入を見出すために行われるものである川野氏⁸⁾のいう2つの情報収集の方法、①患者を全体からとらえる方法 ②ある枠組みからとらえる方法のうち、対象とのかかわりの中で、気づき、感じたことを大切に、枠組みから対象を捉えるのではなく、白紙の状態を対象を捉える①の方法と規定する。

研究方法

1. 対象

18年度後期・19年度前期に精神看護学実習を行った本学の3年生で、研究の同意を得られた学生79名

2. 研究期間

2006年10月～2007年9月

3. データ収集

カルテに頼らない情報収集の方法はどうであったかを問うアンケートを精神看護学実習終了時に実施した。

4. データの分析

自由記述データの分析は、ベレルソンの内容分析の手法を用いて行った。単文を1記録単位とし、記録単位の意味内容の類似性に基づきカテゴリ化を行った。意味内容が捉えにくい記述については無効とし、一内容一項目を含む文章を単位とし分類した。文脈単位は、学生1人分の質問紙全体を単位とした。また、各カテゴリにおける記録単位の出現頻度を数量化して集計した。カテゴリの信頼性は、研究者を含め3名による分析を行い、Scott, W.A.の式に基づき一致率を算出し検討した。

5. 倫理的配慮

研究の趣旨を説明し、アンケートは個人名が特定されないように無記名とし、内容は成績に影響しないこと、および、個人的に不利になることはないことを説明する。得たデータは本研究のみに使用し、研究後はデータを破棄することを約束する。また、研究協力は

自由意志であることを口頭と、文面で説明し、署名をもって同意を得た。

実習指導展開

2週間の病院実習での流れと指導方法

1週目：3日間はカルテに頼らず、対象とのかかわり情報を得ていく。

対象のかかわりを通して感じたこと、観察したこと、気づきなど、得た情報をアセスメントし、看護の視点(援助項目)を考える。さらにアセスメントした結果、情報を収集していくが、この段階で、必要であれば根拠を持ってカルテを活用しても良いとしている。

2週目：看護過程を活用し、援助を展開していく。

対象の日々の変化とともに毎日が情報を得ていく過程であるゆえ、計画を追加修正していく。

結果

対象者79名中、78名が分析対象となった。アンケートの記述内容は140の記録単位に分割できた。140の記述単位を意味内容の類似性に基づき分類した結果、5つのカテゴリに分類することができた(表1)。カテゴリへの分類の一致率は、再検討を行い93.4%であった。抽出された記録単位数の多いカテゴリから順にその内容を述べる。以下の記録単位数は数値のみとする。

表1. カルテに頼らない情報収集の方法についてのカテゴリと記録単数及び頻度

カテゴリ	記録単位数	%	人数	%(n=78)
1. 主体性	43	30.7	37	47.4
2. 看護の姿勢の涵養	39	27.9	33	42.3
3. コミュニケーションの効用	23	16.4	21	26.9
4. 情報収集における自己信頼	22	15.7	20	25.6
5. 努力への大儀さと実践力への不安	13	9.3	11	14.1
合計	140	100.0		

1) 【1. 主体性】

このカテゴリは、37名(47.4%)の記述で、43(30.7%)から形成され、さらに4つのサブカテゴリに分類された。サブカテゴリは、「自力への啓発」18、「五感の活用の会得」11、「積極的行動への足がかり」7、「思考力への自認」7であった。具体的内容は“患者さんを知りたい、もっと近づきたいという気持ちが強くなった”“自分で感じる事ができた”“自分の観察したことを大切にできる”“患者さんをよく見ようと積極的になる事ができた”“自分で考える事ができた”“自分の観察力を知ることができた”などであった(表2)。

2) 【2. 看護の姿勢の涵養】

これは、33名（42.3%）の記述で、39（27.9%）から形成され、さらに、3つのサブカテゴリに分類された。「先入観の排除」27、「人としての関係性の気づき」9、「ありのままの自分への気づき」3であった。具体的な内容は、「疾患にとらわれずに接することができた」「最初にカルテを見てしまうと、固定観念が生まれて偏見に惑わされ、うまくコミュニケーションが図れないのでよかった」「カルテを見なくても看護はできると思った」「素直な気持ちで、人間対人間で向き合えたような気がする」「疾患ではなくしっかり患者さんを見ることができた」「本当の人と人とのかわりができるといった」「素直に向き合うことができた」などであった（表2）。

3) 【3. コミュニケーションの効用】

このカテゴリは、21名の記述で23の（16.4%）から形成され、5つのサブカテゴリに分類された。「コミュ

ニケーション技法の理解」は9、「コミュニケーションの重要性」は2、「非言語的コミュニケーションの重要性」3、「コミュニケーションは情報収集となる」が7、「コミュニケーションの達成感」は2であった。具体的な内容は、「コミュニケーション技法を学べた」「何のためにコミュニケーションをとるのか分かった」「信頼関係を築く上で最も大切だと思った」「動作、表情から読み取ることがたくさんあることが分かった」「カルテを見なくてもコミュニケーションを通して情報収集ができる」などであった。

4) 【4. 情報収集における自己信頼】

このカテゴリは、20名の記述で、22の（15.7%）から形成された。サブカテゴリは、「カルテの依存への気づき」4、「カルテの活用方法の発見」15、「情報収集の方法拡大の認知」3に分類された。具体的な内容は、「カルテに頼りすぎていたことがわかった」「自然にコミュニケーションの中で情報が得られた」「カル

表2. カルテに頼らない情報収集方法に対する記述の具体的内容

カテゴリとサブカテゴリ	記録 単位数	具体的内容
1. 主体性	43	
1) 自力への啓発	18	観察能力を高める努力ができた/患者さんを知りたいもつと近づきたいという気持ちが強く出てきた/その分が んばろうと思った/自分の力で情報を見つけようとするのができた
2) 五感の活用への会得	11	自分の目で見て、聴いて、感じたことなのでなりよりも確かな情報だった/疾患の特徴を自分で見つけることが できた/カルテで得ることができないことを感じるのができた/自分観察したことを大切にできる
3) 積極的行動への足がかり	7	不明な点については積極的に質問できた/患者さんを良く見ようと積極的になることができた
4) 思考力の発揮	7	自分の観察力を知ることができた/自分で考えることができた/自分の観察、得た情報について理由付けがで きた/自分の考えたアセスメントができた
2. 看護の姿勢の涵養	39	
1) 先入観の排除	27	先入観を持たずに患者さんをありのまま受け入れることができた/いろいろ考えずに新鮮な感じで伝わった/ 実際に話をしないと分からない/疾患にとらわれず患者さんと接することができた/本当の意味で患者さん を知ることができたと思う
2) 人としての関係性の気づき	9	カルテの内容にとらわれず素直な気持ちで人間対人間で向き合えたような気がする/疾患に対して構えて向き 合うのではなく自分と患者さんという形で向き合えた/カルテを見なくても看護ができるといった
3) ありのままの自分への気づき	3	素直に接することができた/楽しくアセスメントできた
3. コミュニケーションの効用	23	
1) コミュニケーションの技術の理解	9	コミュニケーション技法を学べた/コミュニケーションの時間が増えた
2) コミュニケーションの重要性	2	何のためにコミュニケーションをとるのか分かった
3) 非言語的コミュニケーションの重要性	3	動作、表情から読み取ることがたくさんあることが分かった
4) コミュニケーションは情報収集となる	7	コミュニケーションだけでもSOが埋まっていくことが分かった/いろんな方向からコミュニケーションが図れた/ 知らないから話せることもあった
5) コミュニケーションの達成感	2	コミュニケーションを図ることができた
4. 情報収集における自己信頼	22	
1) カルテの依存への気づき	4	カルテに頼りすぎていたことが分かった
2) カルテの活用方法の発見	15	カルテからの情報収集がポイントを絞って行い易かった/人物像を先に見ることでカルテを見たときに再確認 できるので良かった
3) 情報収集の方法拡大への気づき	3	自然にコミュニケーションの中で情報収集が得られた/患者の言動で情報を得ることができるといったことがわかった/ 普段見ていること、感じていることから情報収集できるといったことが分かった
5. 努力への大儀さと実践への不安	13	
1) 記録の大変さ	4	カルテを見る時間が少ないので看護過程の記録が大変だった/なるべく早くゴードンを書きたいので見たほ うがいい
2) コミュニケーションへの不安・焦り	5	情報を得ようと質問攻めになってしまった/患者さんは話したがらず焦った
3) その他の不安・不満足	4	情報が取れないと不安であった/患者さんが理解しにくい部分もある

テからの情報収集はポイントを絞って行いやすかった” “カルテだけが情報収集できるものではなく、普段見ていること、感じたことなどからも情報収集できるのだと知ることが出来た” などであった。

5) 【5. 努力の大儀さと実践力への不安】

これは11名の記述があり、13の(9.3%)から形成された。サブカテゴリは「記録の大変さ」4、「コミュニケーションへの不安・焦り」5、「その他の不安と不満足」4に分類できた。具体的な内容は“カルテを見る時間が少ないので看護記録の記録が大変だった” “なるべく早くゴードンを書きたいので、見れたほうがよい” “情報収集を得ようとして、質問攻めになってしまった” “情報が取れないと不安” “患者さんが理解しにくい部分もある” などであった。

考 察

抽出された5つのカテゴリからカルテに頼らない情報収集の意義について述べる。

1. 主体性について

カテゴリの【主体性】では、半数近くの学生は自ら学習する行動をとっていたことがわかる。2週間という短い実習期間に初日から3日間カルテを見ずに看護過程を展開していくことに焦り、コミュニケーションや自分の観察によって情報を得なければならず、コミュニケーションの苦手な学生には不安が大きかったといえよう。学生は、不安を抱えていながらも、対象者に近づくことを躊躇する自分の心の動きを感じながら、対象に近づこうと努力する。そんな中で、対象から声をかけられると、安堵と喜びを感じ徐々に対象に近づける。そして、自分から近づくよりも、他者が自分に近づいてくるのを待つという学生の傾向から、これまでの自分の対人関係パターンでは通用しないことを知って、自分のところを開いていかないといけないうことに直面していく。さらに、学生自らが感じ、考え、気づいたことを意味づけながら実習展開していく自分の能力を引き出している。矢口氏ら⁹⁾は、21世紀を支える看護師像を、「受動的記憶型ではなく主体的行動型の人間である。与えられた知識を受け取り、覚えていて行動するのではなく、自ら対象に向かって積極的に情報をとり、それを自分の行動経験や知識と統合し、判断し、行動を生み出す、主体的に行動していく人間である」という。カテゴリ【主体性】に示されている、学生の、対象に関心を示し、知ろうという内発的な看護のこころの動きは、矢口氏ら⁹⁾がいう「五感と一体となり行動力として働く看護のセンス」を高

めることにつながっていることがいえる。

2. 看護の姿勢の涵養について

学生は、不安・偏見を抱き実習に望むが、素直なありのままの自分を表現し、対象とかかわっていくプロセスで、徐々に不安、偏見を緩和していた。カルテを見ず、無の状態を対象と向き合うことは、柳川氏¹⁰⁾がいう「学生の精神病・精神障害者に対する不安・偏見に起因する“こころのハードル”を低くする」ことに、早期につながるといえる。そして、対象を疾患から見るのではなく、同じ生活者としての存在であることを無意識に認識していき、生活の中から、精神症状や生活のしづらさを理解することができる。また、“素直に向き合えた”という記述内容から、自然体の自分で接することが関係性を築く上で大切になることを捉えている。素直な自分、自然体の自分というのは、宮本氏¹¹⁾の論文にある、カール・ロジャーズのいう自己一致の概念にあてはまる。自己一致は心の動きを自覚し、その感情を率直に表現することと説明されており、「看護師の自己表現によって引き出された患者の反応には、患者のニーズに関する情報が豊富に含まれる。したがって、まずは自己一致という方法によって情報を収集し、アセスメントを行い、それらの準備作業を踏まえて具体的な援助を実施する」という。まさに、ありのままの自分で接することは、対象のありのままの反応を引き出すことにつながると考える。カルテに頼らないことで、学生は、先入観にとらわれず、関係性の中で、人間対人間の看護を体得していた。さらに、“カルテを見なくても看護ができる”という記述から、生活者として対象を捉え、看護の視点で生活の中から情報を得ていく。そして、その場での対象の反応と自分の反応との相互の関係の中に、看護が存在することを実感しているといえる。

3. コミュニケーションの効用

カルテに頼れない分、コミュニケーションを図ろうと努力し、不安が大きいほどに図れたときには達成感も大きい。何を話してよいのか、傷つけはしないか、精神症状が出ないかと、自分の言動による影響を気にして、消極的になっている学生もいる。しかし、迷い、相手に気を配りながらコミュニケーションの工夫をこらすことは、コミュニケーションスキルの向上につながっている。カルテをみなくても情報が得られ、関係性を築く上で最も欠かせないコミュニケーションの重要性を学習していた。“いろんな方向からコミュニケーションを図ることができる” “知らないから話せることもあった” という記述からは、自然な姿勢で

言葉だけではなく非言語的コミュニケーションを駆使し、場の雰囲気や、環境にも目を向けることができ、広い視野で対象と向き合うことにつながっていると考える。

4. 情報収集における自己信頼

学生は、これまで、カルテ主体の情報収集を行っていたことに気づかされている。“カルテにとらわれた情報収集だったので、苦しいアセスメントしかできなかった”という記述から、カルテの読み方や、必要とする情報が分からないままに、カルテに書かれていることがすべて正しいとまで思っているようである。しかし、カルテを見る前に対象と向き合うことで、自分の感じたこと、考えたこと、気づいたことを意味づけする手段としてカルテを読むことに変わっていた。また、自分の捉えたことと、看護師が捉えたことの違いも気づき、そこから、対象を一方向だけで捉えるのではなく、多角的に捉えることの大切さを学んでいる。また、“普段見ていること、感じたことも情報源である”というように、情報は自分の知識、技術、感性から得られるものであることを実感している。その過程で、観察力の必要性も感じるであろう。

5. 努力への大儀さと実践力への不安

すべての学生がカルテに頼らない情報収集を満足とは思っていない。“カルテを見る時間が少なかったので、看護過程の記録が大変だった”“簡単な情報があるともっとコミュニケーションが図れたかもしれない”と記述にあるように、記録を仕上げることに時間を要するものや、コミュニケーションがうまく図れなかった学生は、情報の不足を、自らの努力を発揮することができなかった原因としている。これは、看護過程の記録の方法と活用方法の理解不足、情報の必要性や整理、分析アセスメント能力が関係する。また、技術面においても、観察の方法や、観察の視点、コミュニケーション能力の低さも関係するが、背景には、緩和できなかった偏見や不安も考えられる。精神科看護は、身体的疾患とは違い、対象の不足なニーズは目に見えるものでもなく漠然としていることから、何を観察し、何を問題としていくのかという看護の視点が分からないことも不安の誘因と考えられる。そして、これまでカルテを見るのが当然であった学生は、記録は正しいことを書かなければならないと思っているようで、自分では情報を得ることができないという不安を抱いていた。まさに記録重視の実習展開を学生はしていることが伺えた。

われわれ指導者は、カルテに頼らない実習展開は、

学生の緊張にさらに重圧をかけ、不安を与えていることを認識しなければならない。そして、それらの学生の心情を踏まえて、個別的に学生の行動、情動の動きに沿い、過度な緊張による学習への影響を回避していかなければならない。無理に対象に近づくとするのはなく、自分の自然なこころの動き、感情の変化を感じながら、それを表現することを助ける。そして、言語的コミュニケーションができなくても、自分の許容範囲内で対象との距離間を保ちながら、気づいたことや感じたこと、観察したことを大切にしていくことを伝え、学生が自ら緊張をほぐし、対象に近づけることを支え見守ることも大切と考える。柳川氏⁹⁾は、「精神科以外の科における「看護計画」は看護の実施過程に「前提」であり、その立案においては医学管理上の判断が最優先される傾向が強い。学生が他科における看護過程と同様な展開を考えて精神科看護実習に望むならば、場合によっては患者との溝を深めてしまう」という。精神科看護では、看護計画にいたるまでの過程が大切で、人としての関係性を築く技術や考え方が重要であることを学生が認識できるように、関わり方のモデリングや個別な学習指導も必要であると考えられる。

結 論

カルテに頼らない情報収集の方法を取り入れた実習展開には次のような意義がある。

1. 学生の主体性を高めることができる
2. 先入観にとらわれず、対象を人として向き合うことができる
3. コミュニケーションを駆使することができる
4. 自分の得た情報の意味づけとしてカルテを活用できる
5. 学生の緊張を高め、不安を与える

主体性を高められない学生については、学生のレイネスに応じた個別的指導は必要であることを示唆された。

本研究の限界と課題

本研究は、実習終了時の記述であったため、学習効果の意義を捉えるのは限界がある。今後は、カルテに頼らない情報収集で、学生はどのような情報を得ているかに焦点を当て、情報収集の内容から学習の効果を明確にしていくことは課題である。

引用文献

- 1) ヘンダーソン V.: 再び看護過程について. 小玉香津子訳. 40 (3) : 122-137, 1988.
- 2) 杉山喜代子ら: 臨床実習における学びの様相, 現象学的アプローチによる体験世界の記述. 看護研究, 31 (3) : 39-52, 1998.
- 3) 持永静代, 大下静香: 看護過程による実習指導における問題点. 看護教育, 30 (5) : 291-298, 1989.
- 4) 柳川育子: 精神科看護実習における学生の意識変化をもとにした実習展開の検討. 看護教育, 39 (5) : 380-385, 1998.
- 5) 田中美恵子: 看護計画のための情報収集. 精神看護学, 1 (72), 2001.
- 6) 戸田由美子, 越智百枝: 精神看護学実習における学生の患者理解の過程—情報収集・アセスメントの分析より—. 香川医科大学看護学雑誌, 6 (1) : 167-178, 2002.
- 7) 林真由美, 岩井恵子: 精神看護学実習における情報収集のための効果的な指導方法. 日本精神科看護学雑誌, 46 (1) : 373-376, 2003.
- 8) 川野雅資: 精神臨床看護学. 精神看護学Ⅱ. ヌーヴェルヒロカワ (東京), 第4版, 2006.
- 9) 矢口みどり, 大下静香ら: 看護のセンスを育てる探求的学習行動を通して (その1). 看護教育, 41 (1) : 59-63, 2000.
- 10) 柳川郁子, 柳川和夫: 生活者の視点を重視した精神看護学実習の展開. 看護教育, 42 (2) : 110-113, 2001.
- 11) 宮本真巳: 感情を「読み書き」する力—エモーショナル・リテラシー, 自己一致, 異和感の対自化. 精神科看護, 32 (9) : 18-27, 2005.
- 12) 武井麻子: 感情労働としての精神科看護—治療的なかわりをつくるために. 精神科看護, 32 (9) : 12-17, 2005.
- 13) 日下知子, 曾谷貴子ら: 看護学生の対人関係能力に関する研究—精神看護学臨地実習終了後における検討—. 川崎医療短期大学紀要, 25 : 29-34, 2005.
- 14) バーナード・ベレルソン: 大衆とマスコミュニケーション3: 内容分析. 社会心理学講座7. みすず書房 (東京), 1957.
- 15) 舟島なをみ: 質的研究への挑戦. 医学書院 (東京), 第2版, 2007.

Significance of Information Collection without Relying on Medical Records in Nursing Students' Psychiatric Nursing Practicum

Yoshiko Sakai, Shigeko Doi

Abstract

The purpose of this research is to clarify the significance of the method that does not rely on medical records. The research was conducted with 79 students in the third-year of the psychiatric nursing practicum of our university. Description of the students in interview paper concerning conducting the method which does not rely on medical records were analyzed using the Berelson's content analysis method. As the result of analysis, 5 categories were formed. The following were indicated as significant of the method which does not rely on medical records: 1) Students' independence may be increased. 2) An ability to face the subject as a human without prejudice. 3) Able to make full use of communication. 4) An ability to use medical records are to gather an understanding of the information obtained. 5) Increase stress and create anxiety for students. It is suggested that individualized instruction, depending on the students' readiness, is necessary for students who cannot increase their own independency.

Keywords: Psychiatric nursing practicum, Information collection, Use of medical records, Nursing students, Content analysis